

キルギス語とロシア語の コード・スイッチングに関するパイロット研究

Pilot Study on the Code-Switching between Kyrgyz and Russian Languages

小田桐 奈 美
Nami Odagiri

In this article, the author explores the phenomenon of code-switching (CS), defined as “the juxtaposition within the same speech exchange of passages of speech belonging to two different grammatical systems or subsystems (Gumperz 1982),” between Kyrgyz and Russian languages in Bishkek, the capital of Kyrgyzstan. While CS between the two languages is commonly observed in Bishkek—known to be a bilingual space—CS is often criticized as one of the causes hindering the spread of Kyrgyz language as the “state language,” a symbol of an independent state.

First, the author clarifies the frequency, patterns, and types of CS between the two languages. Second, the functions of CS between Kyrgyz and Russian are discussed, including the CS functions as proposed by previous studies. Last, as a pilot study, the author identifies relevant research questions for the future study.

The discussion in this article is based on the results of semi-structured interviews (originally conducted to analyze the overall language situation in Kyrgyzstan) with three ethnic Kyrgyz people from the major ethnic group of Kyrgyzstan by the same author.

キーワード

Code-switching, Post-Soviet states, Kyrgyz language, Russian language

1. はじめに

本稿は、キルギス共和国¹⁾の首都ビシュケク市で頻繁に観察される、キルギス語とロシア語のコード・スイッチング（以下 CS とする）の実態の一端を明らかにするものである。

CS とは、「二つの異なる文法システムあるいはサブシステムに属する会話の一節を、ことばの一連のやり取りの中で並置すること」である（ガンパーズ 2004: 73）。多言語社会における二言語の併用には、地域や場面、状況、相手に応じた使い分けなど様々なあり方が見られるが、

一連の会話の中で二言語を織り交ぜながら併用するCSは、二言語併用の中でも特に動的なものであるといえよう。

ソ連崩壊後の旧ソ連諸国では、基幹民族²⁾(titular nation)中心の国家運営の一環として、各基幹民族語を「国家語 (state language)」として推進する言語政策が実施されてきた。キルギス共和国では、国家語であるキルギス語に加え、ソ連時代に広く普及したロシア語が「公用語 (official language)」として定められ、首都を中心として現在もなお様々な領域で使用されている。すなわち、同国では公的に二言語主義が実施されているのである。その一方で、特に行政や学術分野でキルギス語の普及が進まない現状が問題視され、語彙の整備や辞書の出版など、同言語をあらゆる領域で使用するための取り組みも行われてきた。その過程では、国会議員に対してロシア語を混合せずに「純粋な」キルギス語を話すよう要請が行われるなど³⁾、一部でCSがキルギス語普及の障害として表現される傾向が見られる。このように、CS現象の存在自体は現地の人々によっても広く認知され、言語政策上の主要な論点の1つとなっている。また、国内外の研究者や現地メディア、そして一般の人々によってもある種の社会現象 (キルギス語とロシア語を混合する話し方) として指摘されてきたが、これまでその実態は、事実上、学術的に解明されてこなかった⁴⁾。

2. 研究方法

本稿では、小田桐 (2015) による、キルギス人⁵⁾13名を対象とした半構造化インタビュー⁶⁾のデータの一部を用いる。当該インタビューは、本来キルギス共和国における言語状況、言語政策、言語とアイデンティティに関する諸問題を広く考察することを目的に実施されたものである。事前に用意された質問項目は、日常生活において、いつ、どのように特定の言語を使用しているか、政府の言語政策や自身の言語使用をどのように評価するか、どの言語を自分の「母語」⁷⁾としてみなすか等である。

キルギス人はキルギス共和国の基幹民族であり、2015年の推計人口に基づく民族構成は以下の通りである。キルギス人72.8%、ウズベク人14.5%、ロシア人6.2% (統計委員会によるデータを基に、筆者計算)。近年のCS研究の傾向として、移民コミュニティや国際 (異民族間) 結婚家庭など、どちらかといえば特定の国・地域における少数派を対象とした研究が盛んであることが指摘できるが、キルギス語とロシア語のCSは、多数派であるキルギス人の間で頻繁に観察されることが特徴である⁸⁾。

インタビューは、キルギス語またはロシア語、あるいは両言語での回答が認められる旨説明した上で行い、実際に発話された両言語の分量には、インフォーマント間でばらつきが見られた。本稿では、首都在住者 (13名中9名) の音声データを聴取した結果、複数回以上のCSが確認されたものの中から、各インタビューにおけるインフォーマントの発話が、①主にキルギ

ス語で行われたと判断できるもの、②主にロシア語、③二言語同程度の3例を取り上げ、CSが発生している部分を中心に改めて書き起こした上で再分析した。インタビュー時間は各15～25分程度である。以下の表1に、インフォーマント3名の概要を示す。

表1 インフォーマントの概要

記号	A	B	C
インタビュー全体の発話	主にキルギス語	主にロシア語	二言語同程度
性別	女	女	男
年齢 ⁹⁾	26	31	30
職業	中国語教師	日本語／ロシア語教師	自営業
出身地 (図1参照)	農村部 (タラス州)	農村部 (イシケクル州)	首都 (ビシュケク市)
学校の教授言語	キルギス語	ロシア語	キルギス語
「母語」	キルギス語	キルギス語	キルギス語
最も得意な言語 (話す場合)	キルギス語	ロシア語	キルギス語、ロシア語
最も得意な言語 (読み書き)	ロシア語	ロシア語	キルギス語、ロシア語
日常生活での言語使用	家族や親戚、隣人とは主にキルギス語だが、ロシア語が混ざる。職場、友人との会話、テレビ番組、手紙を書く時等はロシア語。	テレビや新聞、読書はロシア語。それ以外は二言語を併用／混合。	家では主にキルギス語だが、ロシア語が混ざる。テレビ番組 (ニュース) は主にロシア語。それ以外の場合は二言語を併用／混合。



図1 キルギス共和国の地図

概してCS研究は、CSのパターンや文法的側面を扱う言語学的アプローチと、CS発生の社会的背景や機能に注目する社会言語学的アプローチに大別される。この点を踏まえ、本稿では、まずビシュケク市在住者のCSの発生頻度とパターン・特徴を明らかにした上で(第3章)、CSの機能について若干の考察を行う(第4章)。

本稿で扱うデータは、CSを分析するための言語データとしては、インフォーマントのコミュニティに属さない筆者が実施したインタビューであるという点で限界を持つ。だが、本稿を筆者によるキルギス語とロシア語のCSに関する研究プロジェクトのためのパイロット研究と位置づけ、今後探究すべき研究課題を明らかにすることも目的の一つとしたい。

3. 言語学的観点から見たCS

第3章では、まず発話ターン内でCSが発生する頻度を明らかにした上で(3.1)、CSが発生したターンを取り上げて分析する(3.2)。なお、本来CSは発話ターン間でも発生しうるが、会話の相手が筆者であることを考慮し、今回は分析対象外とした。

3.1 発話ターン内のCS発生頻度

音声データを聴取した結果、インタビュー中の発話が、それぞれほとんどキルギス語、ロシア語で行われたと判断できるインフォーマントAとBは、1つの発話ターン内でのCS発生頻度も極めて低いと予想される。一方、一見どちらの言語が主となっているのか判断が難しいCの発話では、CSの発生頻度が高いと考えられるが、①ほとんど全てのターン内でCSが発生している、あるいは②一言語のみで発話されたターンが、ほぼ同じ回数繰り返されている、という少なくとも2つの可能性がある。

分析にあたっては、発話ターンごとの使用言語を調べ、①CS発生ターン、②キルギス語のみのターン、③ロシア語のみのターンの3つに分類した。その際考慮すべきこととして、キルギス語にはロシア語起源(経由)の借用語が多く¹⁰⁾、またロシア語同様にキリル文字が用いられるため¹¹⁾、特定の語彙がどちらの言語に属するのか、判断が困難な場合が生じることが挙げられる。例えば、以下の発話はキルギス語によるものだが、ロシア語と共通の語彙(冷蔵庫、テレビ)が使用されている。

Misaly kholodil'nik televizor degen aralashtyrbaim desem bolboit. (インフォーマントA)

例えば、冷蔵庫、テレビというのは(ロシア語を)混ぜないようにしようと思っても難しいんです。

インフォーマント自身は、これらの語彙をロシア語として認識しているが、ロシア語-キル

ギス語辞書 (Judakhin 1957) には、それぞれのキルギス語訳として、ロシア語と全く同じ語彙が記載されている¹²⁾。本稿ではこのように、キルギス語による発話で使用されるロシア語と共通の語彙について、ロシア語-キルギス語またはキルギス語-ロシア語辞書に同一の語彙が記載されている場合、すでにキルギス語に定着した借用語と判断し、便宜上キルギス語のみの発話として分類した。

発話ターンごとの使用言語は以下の通りである (表 2)。

表 2 発話ターンごとの使用言語

記号	合計 ターン数	CS 発生ターン	キルギス語のみ	ロシア語のみ	判断不能 ¹³⁾
A	70	16 (22.9%)	52 (74.3%)	0 (0%)	2 (2.9%)
B	51	10 (19.6%)	1 (2.0%)	39 (76.5%)	1 (2.0%)
C	44	16 (36.4%)	15 (34.1%)	10 (22.7%)	3 (6.8%)

(※数字はターン数)

インタビュー全体で主となる言語が明確である A と B は、予想通り、その言語のみが使用されるターンが大部分を占めているが (A : 74.3%、B : 76.5%)、ターン内の CS も一定程度発生していた (A : 22.9%、B : 19.6%)。一方、キルギス語とロシア語を同程度使用していると判断された C については、A と B よりも CS の発生頻度が高かったが (36.4%)、全てのターンで CS が発生しているわけではなく、いずれかの言語のみで発話されるターンも多く見られた (キルギス語 : 34.1%、ロシア語 : 22.7%)¹⁴⁾。

3.2 CS のパターンと特徴

CS 研究では、これまでに様々な CS の類型方法が提案されてきたが、ターン内で発生した CS を分析するにあたって、以下の 3 つに注目する (Appel and Muysken 1987: 118)。

- (a) 付加的切り替え (Tag-switches) : 1 つの文内で、他の部分とは異なる言語によって付加された、感嘆詞や挿入句など。付加された語彙によって、1 つの言語で完結するはずだった文に、バイリンガルの特徴が加えられる。
- (b) 文内切り替え (Intra-sentential switches) : 1 つの文内で発生する CS。このタイプの切り替えは、コード・ミキシング (code-mixing) と呼ばれることもある¹⁵⁾。
- (c) 文間切り替え (Inter-sentential) : 文と文の間で発生する CS。

本稿で分析したデータ内で観察されたのは、ほとんどが文内 CS で、明確な付加的切り替えは見られず¹⁶⁾、文間 CS は全体で 4 例 (B : 2 例、C : 2 例) のみであった。

ここで、最も頻繁に観察された文内 CS に注目し、文法的な枠組みを作る「母体言語 (matrix

language)」と、そこに挿入される「埋め込み言語 (embedded language)」(Myers-Scotton 2002; 難波 2014: 117) を明らかにする (図2)。

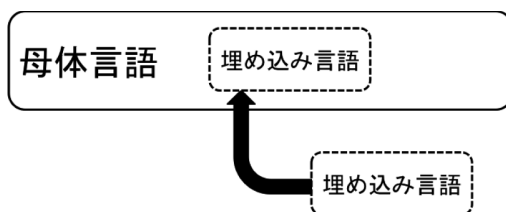


図2 文内CSの母体言語¹⁷⁾

母体言語を特定するにあたり、本稿では吉田 (2005: 45) を参考にし、①機能語 (前置詞や接続詞など、文法的な機能を果たす語) を提供する言語、②量的に最も発せられた言語、③主節の動詞を提供する言語の3点を考慮した (表3)。

表3 文内CSの母体言語 (一文ごと)

記号	母体言語=キルギス語		母体言語=ロシア語		母体言語=特定不能		合計
A	20	(100%)	0	(0%)	0	(0%)	20
B	0	(0%)	7	(87.5%)	1	(12.5%)	8
C	19	(45.2%)	8	(19.0%)	15	(35.7%)	42

(※数字は文数)

このように、インタビュー全体で主となる言語が明らかであるAとBは、文内CSにおいても、主となる言語と母体言語が一致する場合がほとんどであった (A: 100%、B: 87.5%)。一方、Cは母体言語が不明な場合も多く (35.7%)、二言語が複雑に入り組んでいることがわかる。

以下に文内CSの具体例を示す。原文 (キリル文字をローマ字に転写したもの) では、ロシア語による発話を太字およびイタリックで示し、翻訳では便宜上英語で示す。

① 母体言語がキルギス語の文内CS

Oshon üchün orus tili aiabai kerek, bizdin zhangy azyrky ***sovremennyi*** zhashoodo. (インフォーマントA)

だからロシア語はとても必要なんです、我々の新しい今の modern 生活で。

② 母体言語がロシア語の文内CS

Nu konechno zhelatel'no bylo by, shtoby eme kyrgyz tili ***schitalsia tak i ofitsial'nym i rodnym.*** (インフォーマントB)

Well of course it would be desirable if ええとキルギス語 was considered to be both official and native.

③ 母体言語が特定不能な文内 CS

Est' kotorje kotorulup turgandar bar. (インフォーマント C)

There are which 翻訳されているのがあります。

3.3 小括

このように、単一のインタビュー内で少なくとも複数回以上の CS が発生しているという点で3つのデータは共通するが、インフォーマント A・B は、インタビュー全体、発話ターンレベル、文レベルの全てで、主となる言語が一定であることが明らかになった。一方、C の発話は各レベルでキルギス語とロシア語が拮抗しており、特に文レベルでは母体言語の特定が不可能な場合も多く、二言語が複雑に入り組んでいることが示された。

それでは、なぜこのように、ビシュケク市に在住する同年代のインフォーマントを対象とした、ほぼ同内容のインタビューでも、CS の頻度やパターン・特徴に大きな違いが見られるのだろうか。その理由としては、出身地や学校の教授言語が影響を与えている可能性が指摘できる。表1に示した通り、A は首都とは対照的にキルギス語が優勢な地方出身者である。B も地方出身者であるが、学校の教授言語はロシア語である。よって、両者ともキルギス語とロシア語の高い運用能力を持つ「バイリンガル」であると判断できるが、特にまとまった発話をする際にそれぞれキルギス語とロシア語を選択する傾向にあると推測される。

だが、同じく表1が示すように、A も B も、日常生活においては二言語を併用あるいは混合していることに注目する必要がある。特に A は、キルギス語を学んでいる外国人と話す際には、ロシア語が混ざらないよう努力すると証言しており、当該インタビューにおいては、主となる言語がキルギス語である通常の会話に比べ、CS の発生頻度が特に低かった可能性が考えられる。C も同様に、日常生活における言語使用について「ある人とはロシア語で、別の人とはキルギス語で話す」と証言しており、いずれかの言語が主となる言語として選択される場合があることも十分考えられる。すなわち、本稿で明らかになった CS の頻度とパターン・特徴が、各インフォーマントに常に当てはまるわけではないのである。

これまで、キルギス共和国の言語状況に関する大規模調査 (Evraziiskii monitor (2007) など) によって、場面ごとにキルギス語とロシア語が使い分けられている実態が明らかになっている。それに加え、CS の頻度やパターン・特徴も場面や相手に応じて変化する可能性が示唆される。

4. なぜCSが発生するのか——社会言語学的観点から見たCS

第4章では、社会言語学的観点からCSの機能について考察する。これまでに、CSには様々な機能があることが指摘されてきたが、例えば Appel and Muysken (1987: 118-121) は、以下の6つの機能を挙げている (筆者訳)。

① 参照機能 (referential function)

- 言語能力が不足している場合や、一方の言語の方が特定のトピックについて議論しやすい場合に切り替える。
- ある概念を表す際に、一方の言語の特定の語彙の方が意味的に相応しい場合に切り替える。

② 方向付け機能 (directive function)

- 言語を切り替えることにより、特定の人を会話に巻き込んだり、会話から排除したりする。

③ 表現機能 (expressive function)

- 一つの会話で二言語を併用することにより、混合アイデンティティを表現する。
- 例：ニューヨーク在住のプエルトリコ人コミュニティにおける、スペイン語と英語のCS。

④ 交感的機能 (phatic function)

- 会話のトーンの変化を示す。
- 例：お笑い芸人が、ネタ全体は標準変種で話すが、オチの場面で方言に切り替える。

⑤ メタ言語機能 (metalinguistic function)

- 会話内で使用される言語について、直接的あるいは間接的に言及するためにCSが発生する場合。
- 例：聞き手に言語能力を見せつけるために行われるCS。

⑥ 詩的機能 (poetic function)

- だじゃれ (語呂合わせ) やジョーク、詩など。
- 例：一つの詩の中でCSを行うことによって、リズムが生み出される。

本稿で分析したデータにも、上掲の6つの機能によって説明可能な例が複数見られた。例えば、3.1の文内CS例①における、ロシア語語彙「*sovremennyi* (現代の)」の挿入は、「参照機能」に該当すると考えられる。インフォーマントAがこの語彙を使用したのは、キルギス語語彙「*zhangy* (新しい)」および「*azyrky* (今の)」の直後である。これら3つの語彙は非常に類似した意味を持つが、インフォーマントAが伝えたい内容を表現する上で、ロシア語の「*sovremennyi* (現代の)」が最も意味的に相応しいと判断された結果、CSが発生したと考えられる。

また、上掲の6つの機能には含まれていないものとして、直接的な引用や、他の人が発言した内容の報告のために言語を切り替える「引用機能」(ガンパーズ 2004: 95)があるが、それ

に相当する例も複数確認された。以下にその一例を示す。

“*Zavtra zavtra*” dep koiot da, anan tigi bolso “*Chto zavtra?*” dese… (インフォーマント A)
(その人が) “Tomorrow, tomorrow” って言うんですよ、それであっちが “What tomorrow?” って言ったら…

以上のように、個々の CS の機能が特定できる場合がある一方で、CS の発生頻度が最も高い C は、3.1 の文内 CS 例③のように、母体言語が不明で複雑な CS が多数見られ、個々の CS の機能は必ずしも明確ではなかった。Poplack (1980: 588) が指摘するように、安定的な二言語併用コミュニティにおける特定の発話状況では、CS 自体が規範となる事例もある。その場合、話者は CS を通して混合アイデンティティを表現していると考えられ、前掲の 6 つの機能のうち「表現機能」に該当する。よって、安定的な二言語併用環境である首都ビシュケク市に生まれ育ったインフォーマント C にとっては、キルギス語とロシア語の CS に満ち溢れた会話様式がありふれたものであり、CS を通して、キルギス語が優勢な地方在住のキルギス人とは、異なるアイデンティティを表現していると考えられる。

CS 研究に関するレビュー論文である田崎 (2006: 65) が指摘するとおり、これまでに異なる二言語併用コミュニティを対象とする研究によって、様々な CS の機能リストが提案されてきた。それらには共通する部分も多く見られるが、対象とするコミュニティによって全く異なる機能が含まれている場合もある。本稿の冒頭部で指摘した通り、キルギス語とロシア語の CS は、近年の CS 研究の傾向とは異なり、多数派であるキルギス人の間で頻繁に観察されることが特徴である。また、キルギス共和国では CS が言語政策上の主要な論点となり、CS をめぐる言説が活発に展開されているという背景も大きな特徴として指摘できる。以上を踏まえ、キルギス語とロシア語の場合に顕著に見られるが、他の事例には当てはまらない機能の有無を検討することが、今後探究すべき課題の 1 つとして挙げられよう。

5. おわりに

以上のように、キルギス共和国の首都ビシュケク市で頻繁に観察される、キルギス語とロシア語の CS の実態を明らかにしてきた。本稿の議論は、ごく少数のインタビューデータに基づいたものであり、またインタビューを実施した筆者が当該コミュニティに属さないという意味で限界があり、決して一般化することはできない。だが、これまで既に指摘されていた、場面等に応じたキルギス語とロシア語の使い分けに加え、本稿によって CS が実際に発生し、特定の社会的機能を果たす様相が明らかになり、また CS の頻度やパターン・特徴の変異性も示唆された。

本稿は、キルギス語とロシア語のCSに関する研究プロジェクトのためのパイロット研究であり、今後探究すべき研究課題を明らかにすることも目的の一つであった。その一例としては、以下の各点が挙げられる。

- ① CSの頻度やパターン・特徴が実際に可変的なものであるとすれば、その要因および背景は何か。
- ② キルギス語とロシア語の場合に、特にCSが発生しやすい品詞(名詞など)はあるか。
- ③ 本稿ではCSと借用語を区別する際に辞書を基準としたが、話者の認識をより反映した基準を設けることは可能か。
- ④ インフォーマントCの発話には、母体言語が不明な文内CSが多く見られたが(35.7%)、他のモデルを適用することによって、それらを説明することは可能か。
- ⑤ 他の事例には見られない、キルギス語とロシア語のCSに特徴的な機能はあるか。

筆者は今後、キルギス共和国在住のインフォーマント同士による会話形式の言語データを収集し、さらに研究を深化させる予定である。

注

*本稿は、日本言語政策学会第18回大会(2016年6月12日)での口頭発表内容に加筆・修正を加えたものである。

- 1) 日本では、一般的に「キルギス」共和国の呼称が用いられているが、同国は1990年12月以来、ロシア語や英語などで国名を書く際に現地の発音に即した表記(*киргиз*, *kirgiz*ではなく、*кыргыз*, *kyrgyz*)を用いている。この点を考慮し、日本では中央アジア研究者を中心に「クルグズ」という表記が用いられることもあるが(岩崎ほか 2004: xix)、本書では慣用に従い、国名の表記として「キルギス共和国」を用いる。
- 2) 各国にその名を冠する民族のことで、「名称民族」と呼ばれることもある。
- 3) キルギス語の発展と普及を使命とする、大統領付属の「国家語委員会」の議長が、2011年にキルギス共和国議会の長に対して行った要請(Barakelde 2011.1.29)。
- 4) その背景としては、ソ連時代には研究遂行上非常に大きな制約があったことや、研究を実施するにあたってロシア語および現地語の運用能力が必要とされることなどが挙げられるだろう。だが、近年は旧ソ連地域の言語状況を対象とした、個別事例を深く掘り下げる研究が徐々に増加しつつある。CSを扱うものとしては、アゼルバイジャン語とロシア語のCSを対象とするZuercher(2009)が挙げられる。
- 5) 本稿では、「○○人」という表現は、国籍にかかわらず「○○民族に所属する人」という意味で用いる。
- 6) 核となる質問はあらかじめ用意するが、インタビューの過程で状況に応じて他の関連する事項についても質問する方法。

- 7) 渋谷 (2007: 175) が、「おそらくソ連ほど、長年、『母語』という概念が、その定義の不確定性をはらみつづ物神化されてきた国はあるまい」と述べるように、旧ソ連地域では、「母語」は政治の舞台においても重要な位置づけにあった。また、国勢調査などにも「母語」に関する質問が含まれており、その際「母語」の定義は回答者の主観にゆだねられ、最もよく身につけている言語が選択される場合もあれば (Ibid.: 177)、ほとんど運用能力が無くても、単に自身の所属民族の言語が母語として選択される場合もあった (Khaug 2004: 128)。
- 8) 民族間コミュニケーションでは、通常ロシア語が使用される。
- 9) 2011年9月1日時点の年齢。
- 10) Orusbaev (1980: 29) の概算によると、1970年代までに現代キルギス語の専門用語 (学問や科学技術関係) の70~80%が、ロシア語起源 (経路) の借用語であった。
- 11) キルギス語のアルファベットは計36文字で、ロシア語に使用されるキリル文字 (33文字) に3文字 (н [ŋ], Ү [y], ө [ø]) 加えたものである。
- 12) なお、参照した辞書には「冷蔵庫」のキルギス語訳として“muzdatkych”も挙げられているが、あまり定着していない。「テレビ」については、筆者が参照した辞書には掲載されていないが、“synalgy”という訳語が存在し、キルギス語への過剰な翻訳を批判する際の例として引き合いに出されることが多い。
- 13) 固有名詞のみの発話などは判断不能とした。
- 14) なお、インタビューの特定の部分におけるCSの集中的な発生は観察されなかった。これは、会話の参加者が同一で、話題が一定 (言語に関する事項) であったためと考えられる。
- 15) CSとコード・ミキシングを区別することには賛否両論があり、一部の研究者はその区別の有用性を疑っている (Ritchie and Bhatia 2004: 337)。よって、本書ではこれらの用語を特に区別せず、両者を包含する用語として“CS”を使用する。
- 16) 本稿で分析対象とした3つのデータ以外では、付加的切り替えに該当する例がいくつか見られた。
- 17) 難波 (2014: 119) を基に筆者作成。

参考文献

- 岩崎一郎ほか編著 (2004) 『現代中央アジア論』日本評論社
- 小田桐奈美 (2015) 『ポスト・ソヴィエト時代の「国家語」——国家建設期のキルギス共和国における言語と社会』関西大学出版部
- ガンパーズ, ジョン (2004) 『認知と相互行為の社会言語学——ディスコース・ストラテジー』井上逸兵ほか訳、松柏社 (=Gumperz, John (1982) *Discourse Strategies*, Cambridge: Cambridge University Press.)
- キルギス共和国統計委員会ウェブページ < <http://www.stat.kg/> >
- 渋谷謙次郎 (2007) 「『母語』と統計——旧ソ連・ロシアにおける『母語』調査の行方」『ことばと社会』10号、三元社、pp.175-207.
- 田崎敦子 (2006) 「コードスイッチング研究の概観——多言語社会のコミュニケーション分析に向けて」『言語文化と日本語教育』増刊特集号、pp.54-84.
- 難波和彦 (2014) 「コードスイッチング: 言語学的側面」山本雅代編著『バイリンガリズム入門』大修館書店、pp.115-133.
- 吉田さち (2005) 「二言語の能力とコード・スイッチング——韓国系民族学校の高校生を対象として」

『社会言語科学』8卷1号、pp.43-56.

Appel, Rene and Pieter Muysken (1987) *Language Contact and Bilingualism*, London: Edward Arnold.

Barakelde (2011.1.29) < www.barakelde.org/news:9752/ > [2011.11.15].

Evraziiskii monitor (2007) *Russkii iazyk v novykh nezavisimykh gosudarstvakh: kratkii predvaritel'nyi otchet o rezul'tatakh issledovaniia*. <<http://www.eurasiamonitor.org/rus/>> [2016.06.13].

Iudakhin, K. (1957) *Russko-kirgizskii slovar'*, Moscow: Gosudarstvennoe izdatel'stvo inostrannykh i natsional'nykh slovarei.

Khaug, V. (2004) "Demograficheskie tendentsii, formirovanie natsii i mezhnatsionnykh otnosheniia v Kyrgyzstane," In Kudavaev, Z.; M. Giio and M. Denisenko (eds.) *Naselenie Kyrgyzstana*, Bishkek: Natsstatkomitet KR, pp.109-157.

Myers-Scotton, Carol (2002) *Contact Linguistics: Bilingual Encounters and Grammatical Outcomes*, Oxford: Oxford University Press.

Orusbaev, Abdykadyr (1980) "Kirgizsko-russkie iazykovye svyazi," In Desheriev, Iu. D. and V. Ivanov (eds.) *Russkii iazyk v natsional'nykh respublikakh Sovetskogo Soiuza*, Moscow, pp.19-29.

Poplack, Shana (1980) "Sometimes I'll Start a Sentence in Spanish y termino en español: Toward a Typology of Code-Switching," *Linguistics*, 18, pp.581-618.

Ritchie, William and Tej Bhatia (2004) "Social and Psychological Factors in Language Mixing," In Bhatia, Tej and William Ritchie (eds.) *The Handbook of Bilingualism*, Malden: Blackwell Publishing.

Zuercher, Kenneth (2009) *Azerbaijani-Russian Code-Switching and Code-Mixing: Form, Function, and Identity*, The University of Texas at Arlington, ProQuest Dissertations Publishing.